The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題（下）
Author(s)	小林, 理正
Citation	詞林. 2020, 67, p. 1-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75582
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/75582　　詞林　第67号　2020年4月

大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題（下）

小林　理正

はじめに

本稿は、前稿「大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題（上）」（『詞林』第六五号、平成三一年四月）に続き、大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』（以下、元斎本）の巻四後半の翻刻を行うものである。これにより元斎本巻四の本文全体が確認できるようになったことになる。

一、元斎本と流布本の差異

元斎本巻四の本文を流布本である元和九年本や承応版本の本文と比較すると、異同が認められる。このことは前稿でも指摘したとおりである。たとえば、本稿における範囲においても、元斎本に

あそひ給につけても又まことしきことふえ文のかたにつけても花四葉（ママ）山のおもしろき春夏秋冬につけてもをの〳〵つかさくらゐをのそむ事もこなたに申は何事もこよなう身のうれへを思ひをかなへ給かたさまもあけくれむかひ見たてまつらまほしき物におもはれ給て（七八丁裏～七九丁表）[1]

とあるところ、元和九年本には

○　元和九年本・巻四之上・六九丁裏～七〇丁表[2]

あそひ給ふにつけても又まことしきかた物をならひをの〳〵身のうれへ思ひをかなへ給ふかたさまもあけくれむかひ見奉らまほしき物に思はれ給ひて

とある。元斎本と元和九年本で囲み表示部が共通している点を踏まえると、二つの囲み表示部の間にある斜体の本文が対応関係にあるとわかる。では、この元斎本の斜体本文は如何なる性格のものなのであろう。挙例部は三谷榮一が巻四本文の検討において取りあげたことのある箇所でもある。[3] 三谷論稿を確認すると、当該本文は第二系統本文（異本系本文）と認定されている。三谷により「第二系統」伝本とされた為秀本当該部の本文を掲げることで、元斎本本文との差異を確認

しておく。

○　為秀本・九三丁裏～九四丁表[4]

いますこしこの御かたをは心ようひしてことふえふみのかたのかたにつけても花もみち山のおもしろさ春夏秋冬につけても又をのつからつかさくらゐのなることもこなたに申はなることこよなう又さらに身のうれへもみたてまつるにいのちのひゆく御ありさまなれは

いくつか異同が認められるが、為秀本と元斎本の斜体本文が同根のものであることは明らかであろう。したがって、元斎本の挙例部本文は流布本系本文の中に異本系本文を混態したものであるとわかる。「紹巴予本が流布本の原型[5]」との見解を提示した先行論にしたがえば、元和九年本は紹巴本の一本・元斎本から異本系本文の箇所のみを取り除き、本文を整えたことになる。しかし、如上の想定が成り立つならば、しいて紹巴本に「流布本」の原型を見ずとも元和九年本の本文は発生しうることになる。元斎本の有り様を踏まえるかぎり、「流布本の原型」に紹巴本を見る必要はないのではないか[6]。

ところで、かつて鈴木一雄は「古活字本（元和九年本：稿者注）の底本として紹巴本、京大久田本、藤浪本などが考えられている[7]」と指摘していた。挙例部を京大久田本・藤浪本を含めて確認すると、京大久田本は本行本文が元和九年本と同様だが、「をの〳〵身の」にミセケチ点を施したうえで、「物をならひ」と「をの〳〵身の」の直後に補入記号を付し、元斎本・為秀本の斜体本文を記している。藤浪本は元斎本と同様である。鈴木の挙げた伝本群から流布本狭衣物語の本文をみつめると、元和九年本の本文は京大久田本からのみ生じることになる。京大久田本が紹巴本と接触したか否は未詳だが、これまで充分に検討されてこなかった京大久田本とのみ流布本の本文が一致する実情は看過してよいものではあるまい。

なお、このほかにも紹巴本、京大久田本、藤浪本の三本の中で京大久田本が流布本と重なる事例を確認している。これまで鈴木の言及は顧みられることがなかったが、京大久田本・藤浪本を加えたうえで、流布本狭衣物語の本文を読み解いていく視座が必要であるといわねばなるまい。この点については別稿を期したい。

前稿の翻刻に稿者の目移りによる脱文や字形類似に因る翻刻ミス、ならびに助辞の見落としなどの誤りが多数確認された。この場を借りてお詫び申しあげる。正誤表は【表一】として後掲した。ご確認いただいたうえ、前稿本文の修正をお願いしたい。

【注】

（1）元斎本の本文は原本の撮影写真に拠る。

（2）元和九年古活字本の本文は三谷榮一『古典資料類従７　元和九年心也開板古活字本』（勉誠出版）に拠る。

（3）三谷榮一『狭衣物語の研究［伝本系統論編］』（笠間書院、平

成一二年）。初出は昭和三七年。

（4）為秀本の本文は『静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成第一編　古物語』（雄松堂フィルム出版、昭和五六年）に拠る。

（5）川崎佐知子「紹巴所用『狭衣物語』とその意義」（『『狭衣物語』享受史論究』思文閣出版、平成二二年。初出は平成一三年五月）。

（6）たとえば中田剛直は「狭衣物語巻一伝本考」（「国語と国文学」第三五巻五号、昭和三三年五月）において、「紹巴所持本を写した天満宮本若くは毛利元康本そのものに拠れるかは別」としながらも流布本の原型を「連歌師間に所伝せし一本に拠れる事は間違ひないであらう」と述べている。

（7）『新潮日本古典文学集成　狭衣物語　上』（新潮社、昭和六〇年）。

【附記】
貴重書の閲覧、ならびに翻刻掲載許可のご高配を賜りました大阪天満宮御文庫、ならびに関係各位に衷心より御礼申しあげます。

（こばやし・ただまさ　本学博士後期課程）

【表一】前稿正誤表

	誤	正	所在	その他
1	このかはら色はめつらしく	このかはらぬ色はめつらしく	一五丁ウ・三行目	
2	三千大世界	三千大千世界	一七丁オ・九行目	
3	こそのなかにも	こそそのなかにも	一九丁ウ・九行目	
4	山かへるとや	山かへるとかや	二〇丁オ・七行目	
5	そとゝはせ給へは	そととはせ給へは	二四丁ウ・六行目	
6	みゝととめ給へる	みゝとゝめ給へる	二五丁オ・八行目	
7	をしかゝりて経よむ人	をしかゝり経よむ人	二六丁オ・一行目	
8	たゝ独かしつき	たゝひとりかしつき	二七丁オ・六行目	
9	あらすなしたるに	あらすしなしたるに	二七丁ウ・九行目	
10	すくれたりける	すくれたりけるふるめきにけるそいとくちおしう	三三二丁ウ・八行目	
11	中将ほのみてすかせ給にこそ侍けれ	そおほされける中将ほのみてすかせ給にこそ侍けれ	三三二丁ウ・八行目	当該本文ガ第九行トナル
12	御いかほとに	御いかのほとに	三三三丁ウ・三行目	
13	まいり給へけれは	まいり給へれは	三六丁オ・一行目	
14	ありつる返りこと	ありつるかへりこと	三八丁オ・五行目	
15	むかしより聞ゝそめて	むかしよりきゝそめて	四〇丁オ・一行目	

16	さかり御身やつし	さかりの御身やつし	四二丁ウ・三行目	
17	人こそ見えね秋の	人こそ見えねあきの	四六丁ウ・四行目	
18	さらんとくちおし	つらんとくちおし	四七丁オ・二行目	
19	いと、のおりゆかしう	いと、のこりゆかしう	五三丁オ・二行目	
20	見くるさをそ	見くるしさをそ	五五丁ウ・三行目	
21	か、御せうそこ	か、る御せうそこ	五六丁ウ・五行目	
22	えかよひはや	えかよはすや	五八丁ウ・九行目	
23	ま、にありあけの	ま、にはありあけの	六〇丁オ・六行目	
24	ありぬやう見ない給て	ありぬへう見ない給て	六一丁ウ・九行目	
25	まつりてううちゑみ	まつりてうちゑみ	七三丁オ・八行目	
26	まてたゝしのひやかに	まてはたゝしのひやかに	七三丁ウ・一〇行目	
27	思ふなりおひ人ひ	思ふなりおい人ひ	七三丁ウ・一〇行目	

【翻刻】

【凡例】

一、底本は大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆本『狭衣物語』（請求記号：三〇―一）巻四の写真版を用いる。

一、本文は原本の体裁を可能な限り尊重するものとする。丁移りを「|」で示し、丁数と表裏を「|」（〇丁オ（ウ））と記す。なお丁数は墨付き丁数である。

一、変体仮名はすべて現行の平仮名に改める。また「ハ／ニ／ミ」は「は／に／み」とし、旧字体、異体字は通行する字体に改める。

一、ミセケチはすべて「取り消し線」で示す。

一、削訂の場合「X（Y）」と表し、削られた文字を丸括弧内にいれて示す。

一、傍記は、該当本文横に記す。なお、補入記号は「〇」で示す。

一、損傷本文と思しい表現も原本にはあるが、すべてそのまま翻字する。

一、今回は前稿の続き、七四丁オより以降を翻刻する。

とりそくしたるをありつくへきやうに物せよとの給
を聞ほとはたゝうちゑみて殿うへもなにしにかきこえさせ
給はむいかにも〳〵御心とゝめさせ給はん人をはいかてと
こそのたまはすれまいてあなかたしけなやいかにおほし
めしよろこはせ給はんものをあなうれしやおもふことこそ
なくなり侍ぬれと聞ゆれは心とゝまりなとたちまちに
さたむへきならねと心ほそけなめる人なれはなにかは
心やすからす物むつかしき世中のなくさめにもとおもふなりと
かたらひをきてわたり給ぬるまにそ大貳ちかくまいり
よりて御木帳のかたひらひきあけて見れは御ふす
」（七四丁オ）
まのしたにうつもれて人おはすとも見えぬに御くしは
かりこちたけにたゝなはりゐていと所せけなるいてよも
なに事もなのめにおはせん人をかくまてもてなし給はし
とはおもひつれとうちみるはなをおとろかるれはよりて
ひきのへてすそうちやりたるにまことにをくれたるすち
なしとはこれをいふにやと見えてとかくもすへるつや
すちのうつくしさなとのさい院の御くしにいとよくに給
へりなかさそすこしおとりてやと見ゆるは御としの程
にしたかひ給へるにやとみるにかうおとろききこゆる
けはひをきゝて弁のめのともよりたれはとのゝ御けしき
」（七四丁ウ）
また見奉りしらぬさまに見えさせ給へるかめつらしさに

おとろかれ侍てちかうまいり侍にことはりにこそとこの
御くしはかりにまつ思ひ給へなりぬよと、もに世中を
たゝよはせ給てあけくれとのうへの御まへよりはしめ
まいらせわたくしの心きもをまとはし侍りてたゝすこ
しのほたしにおほしとまりぬへからん人を見き、いて
はやとからくにまてもたつねまほしけにおほしさはく
める御いのりのしるしにやとかへす〳〵むねやすまる
心ちし侍てなむまいてうへの御まへなときかせ給は、
いかはかりおほしよろこはせ給はん物を一品宮わたりに
」（七五丁オ）

きかせ給はんにこのころはおりさへいとおしうなとこその給
はせつれなと君の御心のうかれまとひて露はかり心と、め
給人もなくてさはかれ給へる年ころの御物かたりこまや
かにかたりいて、よろこふにけにかはかりまておほしと、
むる事なかりつらんにあすのふちせはしらすけふはかり
にてもいかなる御すくせにてかは人もかう見しり給
はかりの御けしきにもとうれしさもをろかならねと
いとさはかりならん御心のうちなこりなきやうはありかた
くこそ侍へかなれとしころもかやうなる御けしきとは
うけたまはりなからき、しま、たつねとるらんあまたの
」（七五丁ウ）

つらにてはほいなしやとのみおほしつ、むめりしほとに
あさましう打すてきこえさせ給てしのちいくらはかり
のほとをたにもへすあくかれいてさせ給ひぬるいかなる
ことにかとほれ〳〵しき心ちし侍てなむ皇后宮よりも
きこえ給やうも侍しをかうわかぬ御ことにしも物せさ
せ給てつゐにいかなる事侍て身つからの浅ましう
もてなしきこえたるにかなり侍らんとやすきそか
侍らぬにいと、御物かたりともにしたくつれたる
心ちし侍れといふさまもいとめやすき人さまなり
あなまか〳〵しやおほろけにおほしさためたる御心には
」（七六丁オ）

侍らしよし見奉り給へ春宮にまいらせ給へらんに
おとりたる御ありさまによもてない奉り給はし
なと心をやりていひちらしつ、御くしをうちもをか
すめてゐたりまことにさい相はきのふはわたり給はす
なりにしにおほつかなさにふみたてまつれ給ほとに
大将殿より御文あるをまつ見給へはにはかなるやう
にもおもひ給へしかととみには日つゐてもよろし
からす侍しかはよへなむこの侍ところにわたしきこえ
させてし弁なとはさはかれきこえなむとていみしう
おち侍しかとやすくふみわけ給へるあと、もみえ侍ら
」（七六丁ウ）

さりし庭のけしきも見をきかたくおもふたまへ
られしかはなむかんたう侍ましうはゆふつかたたちより
給へ身つからきこえんなとやうにその給けるさこそ

はとおもひつることなれといとにはかにかる〳〵しき
さまにてわたり給にけれはくちおしうおほゆれといて
さはれ中〳〵まかせたてまつりてんかしうちなとにき
かせ給はむこともひんなかるへけれはことさらにしのひ
たるさまにもてなさむとし給ならむとおほせは
御返事にも月ころわつらふこと侍つる人のこの五六日は
いたうくるしかり侍れは見たまへあつかひてふる郷も
」（七七丁オ）

いとゝあらし侍りつるにたちよらせ給けるをなむおとろ
き給ふるさてもなとか御前にはめすましきなと聞え
給へり弁のめのともとにもにはかにわたり給にける
あさましくなとの給はせてふち衣なれとなへて
ならすきよらなるともたてまつれ給へりひめ君にも
かうなむふ見侍るときこえさせていみしうなき
しほみ給へるきかへさせたてまつりなとす家は
けさよりつくろひたりつれとみつはよつはにかゝ
やくやうなる殿つくりのしつらひありさまよりはしめ
さふらふ人〳〵のなりかたちなとのおほろけの人さし
」（七七丁ウ）

いつへくもあらすめてたけなれは水鳥のみきはにたち
いてたる心ちしていとわりなしおほいとの、おはします
かたよりはへちに五けん四めむなるしん殿たいらうわた
殿なとみなこの御かたの女房のさうしさふらひくら人所
なとにせさせ給へるなるへし庭のまさこのしろかね
かと見えたるに木草のたゝすまひまてもはねてならす
みゆる枝さしに吹よる風のをとなひもおもしろくいみしう
てこの世とはおほえぬ松の木たちありさまをみかとの
ほかより見いれてもこのうちにあけくれさふらふ人の
なに事をおもふらんいかなるさまなる人かゝるありさま
」（七八丁オ）

すらんなとおもひやられしを身のうへになりて見いたしたるは
身をかへたる心ちのみそするたかきもくたれるも天下にす
こし人なみ〳〵にかすへしらるゝきはのほうしそくは明くれ
たちかひつゝいかなるわさをしていさゝかも御覧し入られん
と心をつくしてあしたゆふへのいとなみにまいりつかふ
まつりてもなにはかりのめてたきことなくたゝ一こと葉も
物なといひふれ給をかしこくうれしきことにてやむこと
なきかむたちめなともうちわたりの宮つかへよりも
まつ〳〵とまいり給つゝ日をくらし夜をあかし給につけ
ては又いますこしこの御かたにまいりようし給そことはり
」（七八丁ウ）

なるやあそひ給につけても又まことしきことふえ文の
かたにつけても花四葉山のおもしろき春夏秋冬に
つけてもをの〳〵つかさくらゐをのそむ事もこなたに
申は何事もこよなう身のうれへを思ひをかなへ給かた
さまもあけくれむかひ見たてまつらまほしき物におも

はれ給てもてかしつかれ給へるありさまのうつくしう
めてたきをはさる物にてこゝら見る人のなかにもこの
御かほかたちけはひありさまにたゝ夢はかりにても打
なすらふへきかこの世になかりけるよとあけくれすくる
日数にそへつゝ見奉るたひことには若君のすくせは
」（七九丁オ）

人にはまさり給へりけりとのみ思ひしらるゝにみ奉りて
のちはよひのほとなとたにたちかくれ給おりもなく
まれ〳〵も一品宮はかりにうちかよひまいり給もあかしも
はてすひるまのほともくらしかたけなる御けしきを
見るにつき草に聞たてまつりし御心のうしろめ
たきなれと思ひしよりもすきたる心ちのみするに人〻
のすきにしかたの物かたりなとをきくにそなをいと
あやうくも又たのもしくもありける殿うへは御けしき
のすこしよのつねなるをたゝ御いのりとものかなふなめり
とうれしうのみおほさるれは宮によるむけにとまり
」（七九丁ウ）

給はぬこともうち〳〵にはなけき給つゝえ申給はぬに
わか宮大将の御かたには斎院ににたてまつりたる人そある
みやのひめ君にやあらんされはまろをはふところ
にもよるはねさせすとうらめしけにおほしての給
をあやしとき給て大貳のまいりたるにうへま
まことかさることやととひ給へるははしめよりの
こと、もをきこえさせてとはせ給はさらんかきりは
なにか申すよからぬこと、こそさいなみ給はめと
の給はすれはきこえさせてなむ宮にはいと、物
うけにおほしめしてよしなきありきなともいまはせ
」（八〇丁オ）

させ給はすこよなうかつきたる御けしきに見えさせ
給へはうれしく見奉り侍なり御かたちなとこそ
よき御あはひにみえさせ給へさい院にそあやしき
にたてまつらせ給へるなとかたりていとめてたしと
思ひきこえたるをき、給御けしきもけにいとうれ
しけなりなとさの給ともみつからひとりにはいま、て
の給はさりけるかすならさらん人のきはにてたにす
こしも哀とおほしたらむはをろかにもえ思ふましきを
まいていと心くるしき御ことにこそあなれにはかに
わたり給ていかにつゝましくのみおほさるらんときこえ
（八〇丁ウ）

あつかひ給ほとに殿わたり給てなにことそとの給へは
しか〳〵のことありけるをいままてしらさりけるか
あやしさかの御心ひとつに思ひあつかひ給ふらんもほい
なきことなりやとの給へはいみしうきゝおとろき給て
すへて大貳か心なむくちおしきなりみつからこそうちに
きかせ給はんことなとによりてさもつら見給はめさり
とてもそれにしたかひてそこにさへしらすかほつくり

てあるへきかはそのともにあるらん人も宰相もいかに
あやしく思ひのほかなるやうに思ふらんとていみしうむ
つかり給てさるへき人〳〵めしつゝ御しつらひもの〳〵
（八一丁オ）
しくてうとなともひきかへあらたむへきさまにの給は
せなとしておほしをきてもてかしつききこえさせ給へる
さまかきりなき物におもひきこえさせ給へる斎院の
御心さしにおとり給へくもなかりけりとまりし人〳〵も
又さらぬも心ことなるもかすしらすまいりつとひ宰相も
おもふさまにいて入見たてまつり給にこ宮おはしてかきり
なき内まいりにおほしたちたゝましもえかうしもやと
おもふさまにおほさるゝにもうしろめたくいみしき
物にみをきたてまつりてきえはて給し人の御心の
うちおほしいつるはいとくちおしうおほえ給けり大殿は
」（八一丁ウ）
かくもてかしつき聞え給ても一品宮にまいり給ことの
かたきはいとかたしけなくあるましきことにおほさるれは
さるへきおり〳〵に御けしきとり給つゝなを人め
こよなかるましきさまにもてなしきこえ給へくをしへ
きこえ給をみつからの御心にも心にまかせてもえある
ましき身そかしとみなおほすことなれとうちきくに
はいてやとてもかくても身のくるしかるへきすく
せそかしとおほすに物も申給はすかしこまりてまめたち
給へるを又さそおほすらむかしと見奉り給にはあな
あちきなやかうまてうつゝ人にてみるへかりし人かは
」（八二丁オ）
これよりあるましき心をつかふともつゆはかり心にもの
しくおもはむことをいふへきならすなとおほせはたゝ
すこし物おもひなくさめたる御けしきなるをめてたく
うれしくたれもおほしてかけてたにきこえ給はさり
けりされともとよりかよひまいり給し夜のかすはかくて
のちとてもかはることなうもてなし給へるをたゝつね
のことにていまはたゝあてやかにてみしらぬさまにもて
なして物し給はゝ中〳〵に心くるしうかたしけなき
かたには思ひきこえさせ給へきをあさましう打ゆ
るう夜もなくうと〳〵はつかしうつらき物にのみおほして
」（八二丁ウ）
はかなきことのはのいらへもまれ〳〵はおもひのほかに
とりなしてことすくなにいらへない給つゝはつかしけに
らう〳〵しけなる御ましりに心よからす見をこせ給へは
月日にそへてわつらはしさのみまされはかやうの
こともとやかくやとうちかたらひいひもなくさめたて
まつり給へうもなけれはたゝかたみにをしこめて谷
のむもれ木にてそすくし給ける女宮もとしころは
あさましう見まうき心とおほしなからさすかにその
こと、とりたてゝなめけにみえきこゆることもなけ

れはたゝ心のくせにこそは身こそつらけれとおほし
」（八三丁オ）
しりて人のつらさはとかむましきにおほしめし
つるをいとかうまたしらすめてたき御なからひの
ためしにいひたてらるゝかたつかたさへいてきにたれは
いとゝいふかたなうのみおほされてやかてこの御はての
ほとにあまになりてみえすなりなはやと人しれす
おほせとそれにつけても人をも身をもうらみ給て
身をすてつるためしにいま行すゑまてもいひなされん
さまの人わらはれに心うかるへきを又さりとてつゐには
たえはてむありさまをかはらぬさまにて見はてんも
いますこしおこかましく我心のうちもなくさめ所なかる
」（八三丁ウ）
へしなとおほしなりてうすすみそめをはやかてたち
かふましくまうけさせ給てわたり給へるおり〳〵も
すへてかくれつゝさらに見えたてまつり給はぬなり
けりすきにしかたはかやうなるよな〳〵もさして心
とまるかたのなかりしかはこそ姫君ふところにふせ
たてまつり給又わかき人〳〵とはかなき物かたりなと
うちしつゝまきらはしあかし給しかいまはよろつに
おほしつゝめと見まくほしさにはいさなはれ給てさのみも
えつくろひやり給はぬをいとゝあさましとのみ御心に
あまるおりは二三日なともおきあかり給はすなきし
」（八四丁オ）
つみ給へりかやうにて年もかへりぬれは大将殿の御かたは
女君の御すかたなとこそあらたまるしるしとても花やかなら
ねと殿の御かたにもとよりさふらひし人〳〵はきぬの
色とも春のにしきをたちかさねたりさま〳〵いはゐ
過しつるはての十五日にはわかき人〳〵こゝかしこむれ
ゐつゝおかしけなるかゆつえひきかくしつゝかたみにうかゝ
ひまたうたれしとよういしたるゐすまひおかしう見
ゆるを大将とのは見給てまろをあつまりてうてさらは
そたれも子はまうけむまことにしるしあることならは
いたくともねんしてあらんなとの給へはみなうちわらひ
」（八四丁ウ）
たるにいとゝいまはさやうなるあふれ物いてくるし
き世にこそとうちさゝめくもありけりわか宮そちい
さきかゆつえをいとうつくしき御ふところよりひきい
てゝうちたてまつり給へはうちゑみ給てあなうれしや
宮のあまりかたしけなくおほえ給にわたくしの子
まうけつへかりけりとかひ〳〵しくよろこひ申給も
おかしやかて申とり給てひきかくして女君のおはする
木丁のかみよりやをらのそき給をおかしとたれも見
たてまつりつゝしのひてわらへはあなかま〳〵とてかき
給弁のめのとはうれしきなからさすかにあやうけに
」（八五丁オ）

おほえてかほうちあかめたるそおかしかりけるあたらしき
年のいま〳〵しさにやいとくろきなとはなくてあさきの
こきうすきなとめつらしきさまにあまたうちかさねて
うへにもおなし色のむもんのおり物なとかさなりたる
もいとこは〳〵しくはえなかるへきをあくまてはなやかに
なよ〳〵とにほひおほくきなし給ててならひしてそひ
ふし給へる御うしろてはふきよらむ風の心もうしろ
めたう心くるしかるへうおほさるれはこのつえもさし
よせこれ見給へいまゝて子もたすとなけき給てまろか
こしうてとてわか宮のとらせ給へりけれはわひしう
」（八五丁ウ）
いたきめをこそ見つれまことならは御ためおそろしか
なることをむつかしきわさかなとの給へは御かほいみしう
あかくなしていとゝうつふし給へるか世にしらすうつくし
けなるもなをあさましきまて思ふ人にに給へりける
かなと見給にいとゝあさからす心さしもまさる物から
かはかりをなくさめにてやみねと神仏のをきて給へり
けるにこそはとかたつかたのむねはなをうちさはけは
女君のもちたまへる筆をとりて
たつねみるしるしの枕もまかひつゝなを神山に
身やまとひなんなと人見るへうもあらすかきけかし
」（八六丁オ）
給女君のまんなやかんなやさま〳〵うちとけてかい給
へるすみつきもしやうなとのまことにすくれておかし
けなるをうち返〳〵見給にも思ひしことのかなはぬには
あらすこのかみ山のまとひはまめやかにはあるへかりし
ことかはとおほしなす御すゝりにむめかさねのかみの
なへてならぬかさねてをしまかれたるかあるをとりみて
見給へは皇后宮の御ふみなりけり日ころは行ゑなう
おほつかなき事を思ひ侍つるに一日ちかきほとにと
宰相の物せしかは心やすくなりて侍れとかはそひ
柳は猶いかにそや侍りけるとて」（八六丁ウ）
おなしくはこたかき枝に木つたはてしたえの梅に
きゐる鶯とあるをうちほゝゑみつゝ見給てこの
しつえはこと人のいはむやうにいとからき事もの給
はせたる物かな御返はいかゝきこえ給つるときこえ給
へとはか〳〵しうもいらへ給はねはまめやかに春宮い
かにやすからすおほすらんあさましきことなりやあや
まりてもゆつりたてまつらむこそほいにて侍へけれ
庭たつみ見つけたりし日なともわか物におほいたりし
物を又こよなうとりわき給へりしも人しれすくち
おしきすくせの程とはおほしるらむかしさはありとも
」（八七丁オ）
いまはなにかはさもおほすさらてもかひなからぬやうも
ありなむなとこまやかにうちかたらひきこえ給へる御
あはひみるかひありてめてたきためしにしつへき

かやうになのめならす見るかひある人をあしたゆふへに
みなつさひ給ふには過にしかたの物なけかしさもみな
わすれ給ぬへけれとわか宮のよるの御ふところあらそひ
のわか〳〵しさをなくさめきこえ給たひことにもまつ
かきくもり物哀なる心の中は露はかりありしにかはる
ことなかりけりとさまかうさまにつけつゝあさましう
おもはすなる心のほとを見えたてまつりてもやみぬる
」（八七丁ウ）

かな一品にまいりそめしころほひは心のうちのこかれま
とひし程をゆめのうちにもかよふたましゐあらはをの
つからしり給ひなんとたのまれしをいとみしにもにたる
とありし御てならひをいとおしくかなしかりし物からなへて
よつかぬ心のくせともおほしやすらむと思ふかたもなく
さめられしをこのころはをはすて山の月にはあらぬ
我心にもきこえやらんかたなうてひさしくさへきこえ
させ給はぬも又いかやうにかおほしなすらんと人やり
ならすなけかしくて御かたにひとりなかめふし給へる
ゆふくれの空のけしきとりあつめていとしのひかた
」（八八丁オ）

きにおほしあまりてれいの心ときめきにすこし
ほのめかし給へり
なかむらんゆふへの空にたなひかておもひのほかに
けふりたつ比ときこえ給へりされとれいの中納言
のすけのおほせかきはかりにてかひなきもつねのこと
にてめなれ給ぬへけれとこはかゝるへき中の契の
ほとかは我心のつらきそかしといひやるへきかたなう
わりなき心くるしさなとはたゝきのふけふのことの
やうにかきくらされ給ほとはかゝるひとりゐし給つゝ身を
こかし給ことたえさりけり一品の宮におひいてたまふ
」（八八丁ウ）

ひめ君おとなひ給ふまゝにけになへての人のゆかりとは
いふへくもあらす大将殿にもうちおほえたてまつり
給てなのめに人のおもひきこゆへくもおはせぬあり
さまなれと宮は心つきなきゆかりとおほせはこゝろ
ひとつにまかせて哀におほしあつかふへきことをも
おほさすかはかりまてほのめき給もたゝこの御ゆかりと
心え給へは世をそむきなんのちまてなこりもとゝめ
まうきをたゝあらはしてわたしやしてましとおほすをも
しり給はすなに心なきさまのうつくしさをさすかに
哀にも人しれすおほしけりかやうなるうち〳〵の
」（八九丁オ）

御けしきを御めのとたちなとは見しりたれと
とのにもつゆきこえさすへき御さまにもあらすはつ
かしけなる御けしきなれはたゝ哀に心くるしき御
ことををの〳〵いひあはせつゝすこしける大将殿もすこし
は心えそめ給にし御けしきなれはけにいかにせましと

おほすおり〳〵はありながらいまさらにいかにしてかはほか
さまへももてなしきこえ給はんおほかたのありさま
なとはとかくきこえあらはし給はねとなのめならす
もてなし思ひきこえさせ給つれはかゝりとてもくちおし
うあかぬことありぬへき御行末ならねとへたてなき
」（八九丁ウ）
御なからひにおなし心にもてかしつかれ給やうにはいかて
かはあらむかたみに心のうちをもさはやかならす思ひなし
心くるしうおほさるゝたひことには又むかしをおほし
いてぬおりなしかすならぬきはとあなつらはしかり
しかとかゝる人のたくひもことになかりけれは行末は
しゐてもえおとしめさらまし物をなと大かた過にし
かたをわすぬ御くせの涙もろさたゆへきよもなし
あかぬことなくめてたき人を見給なからもかやうなる
心のうちともたえすならひにけるしのひかたさの物なけ
かしさなとをのつからもりなはゝとのみ思ひ聞え
」（九〇丁オ）
させ給へるかひなくひめ君もうちとけにくゝへたて
おほかりぬへき御心と人しれす見しられ給けり大将
にもひめ君をゆかしくくちおしき事とつねにきこ
えさせ給へれとなをあるやう侍れは今はつゐには
御らむしてんなとのみ申つゝそすくし給けるあつき
ほとになりてはいとゝおもふあたりのすゝしきよりほかには
たちはなれかたくておきふしもろともにすこし給
程に斎院にもれいならすおほつかなき日数へたゝりに
けるをおほしいてゝすゝしき夕風まちつけてまいり
給へれは人すくなにしつかなる心ちしておまへに二三人
」（九〇丁ウ）
さふらひける人もみなうちふしてね入たるにやをらち
かくまいりよりて御木丁のそはより見いれ給へはおまへ
にも御とのこもりたるなりけりふたあひのうす物を
たてまつりてひきかつかせ給へは御かほも身もつゆ
かくれなきに御くしは行ゑもしらすつや〳〵とたゝなはり
ゆきてひたいかみのすこしかゝりたるわけめかむさし
なとなか〳〵いとかうこまやかにはひさしう見たて
まつり給はさりつれはめつらしくうれしくてつく〳〵と
まもりきこえさせ給に昔より猶おほろけならす
思ひしみきこえさせてしけにやいとかはかりなる
」（九一丁オ）
にほひはさらにならひきこえさすへき人こそなかりけれ
いてなを我すくせのくちおしうもありけるかなこれを
わか物と見たてまつらすなりにけるよあふにしかへは
とかやいとかはかりなりけむ人をしもいひをかさりけむ
かしこの御身にかへんいのちはさらにおしからさりける
物を心きよう見ないたてまつりける我心はおほろ
けならす心つよくもありけるかないまとても御身

をもひたすらなき物に思ひなさはかたうしもやはある
へきくつしおほしつゝけてなけしによりかゝり給て
つく〳〵とゐ給へるにうちみしろきて見あはせ給へるも
」（九一丁ウ）
あさましくいきたなさをいかに見給へらむとはつかしく
おほしめされて御かほもいとあかうなり給てやう〳〵
木丁にまきれいらせ給ぬるもいとくちおしう人〳〵
いまそおきつゝすこしいさりのきなとしつれはつね
よりもいとたへかたきみたり心ちにまかりありきも
えし侍らてひさしくまいり侍らてなむさるは一日も
まいり御らむせられぬはいとくるしく思ひ給へらるゝ
にこそ御せんにはさしもおほしめいたらぬ物をなと申た
まへはれいよりはあやしう程へつれと御心ちはえしら
さりけり宮もひさしうはとの給はするをれいよりは
」（九二丁オ）
待とをにおほしめしけるよかう心ことなる人のしるしとそ
おほしつらむかしとむねうちさはき給てくるしうお
ほさるゝそあちきなきや宮はいみしうまいらまほしう
し給へとうへのやかてけふあすわたらせ給はむに
もろともにとのみきこえさせ給へれはけふもうちより
やかてまいり侍れはなと申給てすこしほゝゑみてま
ことや人しれす心ひとつに思たまへあまることこそ侍
つれあらふる神もことはりしり給に侍なれはにやとは
おもひ給へなから又中〳〵なるかたしろをこそ見給へ
しかいてやされとしはしわするゝ心は神もえつけ給
」（九二丁ウ）
はぬわさにやいますこしあやかりやすくそなりにて
侍そらめにやといかて御かゝみのかけに御らむしくらへ
させむとてうちほゝゑみ給へるけしき大貳かいふ
とてうへのゝ給し人のことにやときかせ給へと御
いらへもなけれはうちなけきつゝ
おほかたは身をやなけまし見るからになくさの濱も
袖ぬらしけりとてはてはれいのしのひかたけに
もらしいて給涙のけしきに又かきくつし心つき
なうおほしなられてなをねふたけなるけしきに
もてなしてふさせ給ひぬるに中〳〵なにことにき
」（九三丁オ）
こえさせいてつらむとくやしうおほすそのころ世中
いとさはかしうて道おほちにゆゝしき物おほくやむ
ことなき人もあまたなうなりなとし給へはあはれに
はかなきことをたれもおほさるみかともれいならす
おほされて心えぬさまの夢さはかしう見えさせ給へは
我よのつきぬるにやと心ほそうおほしめさるゝにも
つきのおはしまさぬ事をいかてかくちおしうおほさゝ
らむ大将まいり給へるに御物語こまやかにきこえ
させ給ひていのちもすくせもつきにたる心ちの

するをしらすかほにてのみすこしてこの世をわかるれ
」（九三丁ウ）
さらむことのつみふかうくちおしかるへきを大将の
あつかりのわか宮たゝ人になさんのほいふかしときゝし
かとむつきにつゝまれ給へる女たいにゆつりをき
もしは一世の源氏のくらゐにつくためしをたつねて
としたかうなり給へるおほいまうちきみのはうに
ゐむよりはあへなむとこそ思ふはいかゝさのみいひつゝ
位をおしむともかきりの命の程は心にもかなふへき
ならぬを見るおりに猶一日にても心のとかなるさま
にもなりなまほしくなんとの給はするをいかゝはふと
よき事としもおほされんよの中のしつかならぬ事は
」（九四丁オ）
をのつからさのみこそ侍れをの〳〵さきの世の契の
ほともきゝいれさせ給へきにも侍らす御心ちの
れいならすおほしめさるらんこそふひんにさふらふこと
なれとそは御いのちなとせさせ給てなをしつかに
こゝろみさせ給はんこそよく侍らめあまり物さはかし
きやうにさふらひなむとそうし給てもけにはうに
ゐ給へきみこのおはせぬはいかなることにかとおほし
なけきけりうち〳〵にはわか宮の御すくせのいとかたし
けなかりけること、もてかしつき、こえさせたまふを
大将殿はあるましき事かなとき、給へといかてか
」（九四丁ウ）
さもきこえ給はん女帝もかゝるおりや昔もゐたまひ
けむいかなるへき世にかと人しれすおほすにもかの
みねのわか松とかやいはひをき給けむおひさきのま
ことにかなふへきやうもあらはいかなる心ちしなむさる
ことのあらはしもまことにいけるかひありける身は
おほえなむかしかのつれなき御心にもさりともい
かてかいとむけにはおほされんなと心ひとつにおほす
につけてもさしむかひてとやかくやとかたみに心の
うちともきこえあはする世なくてすきなむは猶
返〳〵思ふにもいふにもあまりてくちおしう心うく
」（九五丁オ）
おほされけり中納言のすけ大貳のめのとおなしはら
からといへとおなし身をわけたるやうにかたみに思ひ
かはしたれとこの人の露はかりももらしたる事をは
心よりほかにちらすへきならねとなき御かけの御
らむせん事もありさはかりかくししのはせ給てすき
させ給しことを心より外に我心にしりそめし事たに
かたはらいたかりけり又入道の宮のこの御わたりには
のこりなくしりたまひたるらんとさはかりおほしめし
うたかひたる物をすゑの世にもをのつからきゝあはせ給て
思のほかなりけりとおほしめされめとてもかくてもいまは
」（九五丁ウ）

わか宮の御ためにたれもをろかに思ひきこえさせ給へく
はなかりけりとおもへは大貳にもこの御ことをかけても
かたらさりけり夏ふかくなるまゝによのさはかしさも
いやまさりにてたかきもいやしきものこる人すくなけに
なり行つゝ月日あまつほしのけしき空のたゝすまひも
しつかならすあはたゝしきまゝに御かともいとゝなやまし
くのみなりまさらせ給へは猶わか世はつきぬるなめりと
おほしめして昔の一条院におりゐさせ給へきさた
めになりぬ年ころもつきのおはしますましきにやと
くちおしきことにあけくれおほしめしつれとさりとも
」（九六丁オ）

あるやうあらむなとたのみすくさせ給へるを昨日
けふとなりてはなをいとほいなき事におほしめす
事かきりなし世の人もまたさかりの御よはひなり
ちゝみかとたにたゝ人になしきこえさせ給てし宮を
又とりかへし坊にすへ給て位をさらせ給事は
あるましきこ事となやめと大殿なとはさはかりやむ
ことなくおはせし后はらになのめにたにあらぬさまにて
むまれ給へりし物をたゝ人になし給あるましかりし
ことそかしなとの給をいとおこかましと大将殿はきゝ給
さかの院にもおほしはなれにしかたさまの事なれと
」（九六丁ウ）

なのめにもいかてかはおほされん命のなかゝりけるか
うれしき事とよろこはせ給に斎宮もあやしう
さとしかちにてなやましけにし給よしきこゆれは
さかの院なともおほしなけくにあまてる神の御け
はひいちしるくあらはれいて給てさた〳〵とのた
まはする事ともありけり大将はかほかたち身のさえ
よりはしめこの世にはすきてたゝ人にてあるかた
しけなきすくせありさまなめるをおほやけのしり
給はてあれは世はあしきなりわか宮はそのつき〳〵
にて行すゑをこそしり給はめおやをたゝ人にて
」（九七丁オ）

みかとにゐ給はむ事はあるましき事なりさらては
おほやけの御ためにいとあしかりなんやかていちとに
くらゐをゆつり給ては御いのちもなかく成給なむ
このよしを夢の中にもたひ〳〵しらせたてまつれは
猶心え給はぬにやなとやうにさた〳〵との給はする事
おほかりけれとあまりうたてあれはもらしつかゝるよしを
しのひて内にもおほ殿にもそうせさせ給へるにきゝ
おとろかせ給事かきりなしわか宮の御ことをそ
たれも心えすあやしうおほしける大殿うへなとの
御心の中そいひつくすへきかたなきやあらたなる神
」（九七丁ウ）

の御心よせとはさたかにきゝなからもあまりにさるましき
ほとの事は行すゑもいかゝとおそろしきかたもさま〳〵

心しつかならすおほさるれとかうき、給てのちは思ひ
ねにやあらむ御かとの御夢にもとの、御夢にもとく
かはりゐさせ給はすはあしかりなむとのみうちし
きり御らむすれはいと心あはたゝしくおほされて
まつ我御みこになさせ給て八月にそ御国ゆつり
あるへきさためになりぬちかき世にかゝるためしも
ことになき事なりとやおほやけをそしりたてまつる
へきやうもなけれとなをいかなる事かあらんといひ
」（九八丁オ）

なやむ人おほかるにたうりをたとりしらぬ女なとはたかき
もみしかきもたゝ時〳〵も見たてまつらんことのたえぬる
事と思ひなけくさま世になく成給へらむ人のやうに
あまりゆゝしきまてそありけるみつからの御こゝろにも
おほしたちしかたさまいとかけはなれはてゝいまさらに
いとあはたゝしくありつかぬ心ちそし給へけれはふさはし
からぬ身のすくせとおほしなけかるゝなかにも斎院を見
たてまつり給はむ事のいまはありかたう成ぬへき
くちおしさはいまさらにいひやるへきかたなけれはこの
世にいひあつかふらんやうにけにはえあるましき事
」（九八丁ウ）

なれはいとかうしもおほゆるにやあらん又えたもつまし
かりけるにやとさすかなるをこかましさをあらはしはてん
ことよなとかた〳〵にさへやすからすわりなき御こゝろの
うちきしかたにもいやまさりになりにたりされと
みかとの御心ちまことしうおもはせ給て一条院に
わたらせ給ぬれはのかれ給へきやうもなう成ぬるに
おほしわひていまは御ありきもあるましけれと斎
院に夕さりつかたしのひてまいり給へりつねよりも
あつさ所せきとしにて御まへにもなやましく
おほしめさるゝにからうして夕風すゝしく吹いて
」（九九丁オ）

たれは人〳〵はしにいてゐつゝ月の心もとなきを待
わたるほとのたと〳〵しさにまきらはさせ給てすこし
ゐさりいてさせ給へるなりけり思ひかけすをとなうて
まいり給へれはふともえ入はてさせ給はぬ御けはひの
つねよりはちかき心ちするにもいとゝ心のうちは
かきみたりてしのひかたしかやうにまいり侍らん事も
いまよりはあるましきさまにうけ給はれはこよひはかり
もなを見たてまつりてこそはとてなんいとあまり
おもひかけぬありさまに侍れはすくせなともつきて
世にえなかゝらぬやうも侍なむまたさらすとも見
」（九九丁ウ）

たてまつらむことこよひはかりこそはかきりにも侍らめ
とえもいひやり給はすいとあまりなる御けしき
をもかくのみかきりなき御なからひともと見たてまつり
しりたるにまいてこの御ありさまはおほつかなうて

一日もけにすくしかたうおもひきこえさせ給はむ事
ことはりそかしなと哀にそみたてまつる御まへにも
見るをあふにてやむへき物とおほしめしつるを思ふ
さまにうれしき御ありさまなからおほつかなさはけにと
はかりはみと、まらせ給へとれいのことつ、けてある
へかしき御いらへもなけれは我御こ、ろの中は
」（一〇〇丁オ）
はるへきやうもなしあきらかならぬ空のけしきも
猶心つくしに見まいらせ給へるをかつらおとこもおなし
こ、ろに哀とやみたてまつるらむあつけにたちくもり
たりつるむら雲はれて月のかけはなやかにさし出
たるに御木丁にはつれてけさやかに見えさせ給へる御くし
のか、りつらつきなと等覚の位にさたまるとも見たて
まつらすなりなむことはくちおしかるへきをましてもと
よりこの世のえいようはことにこのます成にし御心なれは
いかてかなのめにはおほされんあさましき御心のうちの
かけ〳〵しきかたさまをはいまはいかなりともおほし
」（一〇〇丁ウ）
よるへきならねとみつのしらなみなる御ありさまを
雲のよそにのみおもひやりきこえさせ給はんにはなからへ
ぬへからんいのちの程なりともいか、とおほしつ、けて
月のかほのみなかめさせ給ひけり
めくりあはむかきりたになき別かなそらゆく月の
はてをしらねはとてをしあて給へる袖のけしきもか
きりあるよの命ならぬはけにとやおほしめさるらん
あまりにまはゆけれは御木丁をひきよせさせ給て
やをらいらせ給まきらはしに
月たにもよそのむら雲へたてすはよな〳〵袖に
」（一〇一丁オ）
やとしてもみんとなをさりにいひすてさせ給なくさめ
はかりもけに中〳〵なるを思ひはなれぬほたしとも
成ぬへしさふらふ人〳〵なとをも御らむすることの
たえはてなむを哀におほすとみにもいてたまはす
はかなしこともなつかしうきかまほしき御けはひにて
あはれに心ほそけなる事なとをのたまはすれはみたて
まつる人もかう世にめつらしき御よろこひともおほえす
袖もぬれわたりつ、月も入かたになりにけりいまはかう
かる〳〵しき御ありきもいとあるましき事なれは
さのみあるかせ給はむもひんなくていてさせ給御心猶
」（一〇一丁ウ）
せりつみし世の人にもとはまほしくそおほされたる
また夜はふか、らむとおほしつれとあけにけるなる
へし道のほとに恋草つむへきれうにやと見ゆるち
から車とも、あまたやりつ、けつ、行ちかふ御車なとも
いたうやつし給て人すくな、れはにやは、かるけしきも
なくちかき程にのりなからすくるもおそろしきまてに

おほさるれと思ふかたさまへと御らむすれは御めとまり
給てなを見をくらるゝになにのすかたともみえす
ものくるおしけなるさまともをさしも思ひしらぬにや
やすらかにのりなしてこのころわらはへのくちのはに
」（一〇二丁オ）
かけたるあやしのいまやううたともいとしら〳〵しき
こゑにてうたひてすくるけしき心をやりてないかしろに
思ふことなけなるにつけても
な、車つむともつきしおもふにもいふにもあまる
我恋草はとそおほしけるかくて八月廿日御国ゆつり
ありけるかねてよりめつらしかるへき事に天の下いひふる
しつれといまはとかはりゐさせ給程のありさまなと
は猶うつゝとそおほえさりけるなに事もひとつに
思ひきこえさする人はなかりつれとことかきりあれは
おなしさまにうちつれ出入もし給つる人〳〵はあさましく
」（一〇二丁ウ）
のみおほさるゝに見なしにや御かたちありさまかくては
又やうかはりてめつらしきひかりさしそへ給てたゝ人
にすくさせ給けんことかたしけなくそ見え給ける
大殿も関白をは左大臣にゆつりきこえさせ給ておりゐ
の御かとの位にさたまり給てほり川の院ときこえさす
は、宮をは皇太后宮とそきこえさせけるかうおほしかけ
さりし御ありさまとも、さるへきこと、はいひなから
一条院の御心さしをろかならすおほししらるれは一品
宮を猶をろかに思ひきこえさせ給ましくほり川の
院にはきこえさせ給つゝとくまいらせ給へくきこえ
」（一〇三丁オ）
させ給へと心より外に時〳〵見えたてまつりしたに
やすからさりしをいまはなにしにか雲のうへまて人
わらはれにおこかましきありさまをあらはしはてんうき世
の中もかゝるつゐてにこそは思ひはなれめとのたまは
せてまいらせ給はむ事はおほしもかけたまはねは一
条院きかせ給ていとあるましくなを〳〵しき御心
なりとむつかりきこえさせ給てたゝいたしにいたしたて
たてまつらせ給へはいとむつかしくおほしなけかれて
そのよにも成ぬるにつらき所おほくはなさしとやおほし
けん姫君のかきりをめのとたちなとそへたてまつらせ
」（一〇三丁ウ）
給てまいらせ奉り給ぬさふらふ女房なともはか〳〵しく
しらねはまいてとの人ともはとまらせ給ぬるもえしらさり
けり御かとはれいの御けしきのわつらはしけなるを
いかにとはおほしなからさまかはりたるありさまをいかゝ
見たまはむとはつかしきかたにも心ゆるひなう思ひ
きこえさせ給つゝ心ことにひきつくろひてまつき
こえさせ給へるに御こゝちれいならてとまらせ給に
ける御かはりにひめ君なむ一ところまいらせ給けると

そうするをきかせ給にいとあやしくほいなき心ちせ
させ給へといてやいとおもはすにかと〳〵しき御心
」（一〇四丁オ）
はへは見まうくのみおほえさせ給けりをくりをかれ
給へらん御ありさま哀にゆかしうおほしやらるれは
やかてわたらせ給へりひいなをしすへたるやうにてちいさく
うつくしけにてゐ給へるを御らむしつけたるまつかき
くらさるゝ心ちせさせ給いかゝはせんかくまておほしゆつ
りけれはいとゝをろかならすこそは思ひきこえさせめ
すむ人すくなくて内わたりもいとつれ〳〵なるへきを
心やりところにも人の思ふはかりにもてなしてさふらへ
なと御めのとたちにものたまはせていと心くるしけに
そおもひきこえさせ給へるかくみやのとまらせ給にける
」（一〇四丁ウ）
ことを一条院にもき、給てけれはいと物しうおもはす
なる御心と返〳〵きこえさせ給けれといかにも〳〵
おほしそめつる事をはなをらぬ御くせなれは御心ちいと
なやましうおほされてなとそきこえさせ給ける
内よりも日をへてうらみきこえさせ給へとかやうにもて
なさせ給ておさ〳〵御返事もなかりけりこうき殿には
日さにわたらせ給つゝことなとをしへたてまつらせ給に
いとさとくうつくしうひきとらせ給つゝなに事もすく
れて見ところあるさまにおひいて給ぬへきをあはれに
うつくしうおほしめさるゝにつけてもあらましかは心やす
」（一〇五丁オ）
きわたくし物にてましらはまし物をなとわすれかたう
思いてさせ給こといやまさりなりかうのみこの御まいりの
すか〳〵しからすわつらはしかりつるには、らせ給てかの
なくさのはまもいま、て御らむせぬはいと、御心もま
きる、かたなう物なけかしきをいまさりとてもあるへき
事ならねは宰相中将にもまいらせ奉り給へきさまに
のみのたまはすれとれいならすなやましけにし給へは
いかにと見たてまつり給てさやうにそうし給をきかせ
給てもいと、しつ心なうおほつかなうおほしめさるゝ
ま、にとみによるのおと、にもいらせ給はすはかなき
」（一〇五丁ウ）
ことふえさるへきふみともなと御らむしつゝこよなう
ふかして御とのこもるやうなれと心もとまらさりし
みちのほとりともさへおほしいてられてあかしかたし
月いとあかき夜はしつかにおはしますにきまなう
さし出たるを御らんするにもかの夜な〳〵にとの給ひし
御けはひまつおもひいてられさせ給ていみしう恋しく
おほえさせ給ふにさやかなる月影もやかてかきく
もる心ちせさせ給ていと、心も空になりぬ
恋てなく涙にくもる月影はやとる袖もや
ぬる、かほなるむら雲はれ侍めるをいかやうにてか

」（一〇六丁オ）
たゝいまも御らむすらんとゆかしうなとやうにて
ちかうさふらふ殿上のわらはを斎院にたてまつらせ
給へれはけに雲のうへはまいていかにとおほし
めしやらせ給つる烋の月影なれはおかしき御せう
そくなれとまち見給はん御けしきはつかしく
おほしやらせ給へといまは人つてにきこえさせ給
はむもあるましきことなれは
　あはれそふ秋の月影そてならておほかたにのみ
なかめやはするとはかりほのかなる御つかひにきくの
ふたへをりものゝのうちき給はせたるをかつきなから
」（一〇六丁ウ）
まいりたるかしらつきなと月にはへてうつくしき
にめつらしき御うつりかさへなへてならぬにほひに
うちかほりたるそいとゝ恋しくおほえさせ給て
人めもしらす引きよせて涙もおとしかけつへくおほしめ
さる御文のけしきなともたゝおほかたにおもはせたる
なつかしさをはをろかなからぬさまにいひなさせ給へる
さまなともさしむかひきこえさせたる心ちのみせさせ
給ていとゝ御とのこもるへうもなけれはゑむし
ろうのうちとひとりこたせ給つゝうしみつと申まて
に成にけり心やすかりし御ありさまにてたに身を
」（一〇七丁オ）
心ともせぬ世のなけかしさをおほしあつかひしに
いまはいとゝさま〳〵につけてたちまふへき心
ちそせさせ給はさりけるかやうなる御けしきを
一品の宮御かたに心よせまいらするうへ人なとは
つき〳〵しう見なしたてまつりつゝあはれけにかたり
きこえさすれともとより物おもはしけなりし
人くせにいとゝ宮の女御のまいらねはにこそとおこか
ましくそきかせ給ける御つかひもたえすまいりつゝ
かくあさましくほいなきことをきこえさせたまへと
御物うらみのかきりにもあらすすききにし御ありさま
」（一〇七丁ウ）
とものやうにいつとなくなやましうおほさるゝおり〳〵
あれはこそえなかくもあらし物をと心ほそくて御返なと
はかりは中〳〵なつかしけにきこえさせたまへと
まいり給はむ事はいとゝおほしたえてさまかへさせ
給はむ事をそおほしいそきける宮の女御の御心ちは
たゝならぬさまに人〳〵見たてまつりしりて大宮に
もけいしてけれはこのしのふ草の御ことはかりをこそ
さはかりもきかせ給へわか宮の御事なとはたしらせ
給はぬにかうめにちかくあさやかなる御ことをめつらしく
うれしくいかてかはおほしめされさらんこの御ことの
」（一〇八丁オ）
のちよりこそあさましくおほしうかれたりし御

けしきもすこしなをりかくありかたき御くらゐにも
さたまり給へるにいと、をろかならさりける御すくせ
の程さへ見つへき事と院なとのおほしよろこひ
たるさまそいまよりいとこちたかりけるうちにも
かうとそうせさせ給けれはいとゆかしき事をさへ
そへておほつかなさわりなくおほしめせとこの月は
いむへしなとあれは忍すきさせ給て十月にこそ神
わさなとしけ、れとあなかちなるひまにまいり給へる
御つほねは藤つほなりすみそめにやつれ給へりし
」（一〇八丁ウ）

御ありさまにたにみたらし川のかけにもならひきこえ
させ給ぬへくありかたかりしを紅葉のにしきにたち
かへてまいり給へれはいま一しほのみところもまさり
給へるにおほつかなくてすくさせ給つらん日かすもうら
めしくそおほえさせ給けるか、る程はすこし御心も
なくさむやうなるに又いかにそやた、それかとまて
おほえたてまつり給へる御かたちけはひもふと
おもひ出られさせ給かたつかたはまつ御むねふたかり
てこの世のうちなから見たてまつらすなるへしとは
思ひかけさりしわさかなとおほしつ、くる程いかはかり
」（一〇九丁オ）

見れともあかぬ御ありさまをさしをきてつく〳〵と
なかめいらせ給て

かくこひんものとしりてやかねてよりあふ事たゆと
見てなけきけむとおほさる、につけてもくらへ
くるしき心のうちは猶いとわりなしさるはさまこ
とになやみ給へるけしきのらうたけさなと
にもたちならふ人〳〵のあらましかはいかに心より外に
くるしくむつかしからましことをそいたくうるさう
なりにけるもきしかたさへうれしきまてたちはな
れすおきふしかたらひきこえさせ給へりとし比いか
」（一〇九丁ウ）

さまにしてたまさかにかよはしみたてまつるわさもかなと
おもひねかひ給へる上達部みこたちなとかくおほや
けさまにならせ給てはいなひさせ給はぬやうもあり
なむわつらはしかりつる一品の宮さへかく世をそむき
給ぬへかなるはあこの御すくせのめてたかるへきなりと
をの〳〵御むすめともをいと、もてかしつきて大貳の
三位なとして御けしき給はる人〳〵おほかりける
そのなかにも人しれぬさまにてたえ給にしも又さまて
はあらねとさやかなりし月影もしはともしひの
ひかりなとやうにてもすこし心にくきあたりともは
」（一一〇丁オ）

おほつかなきもなくゆかしき事なかりし御心の
うちなれはかくていつしかとかる〳〵しくそれをなと
とりわかせ給へきならねはた、かくてもなかくしも

えあるましきありさまなれはなに事もいとつゝ
ましきをいましはしもなからへはさやうにてなとい
らへさせ給ものから人しれぬ心のうちともはいと
うらめしく思ひいて給わたりもあらむかしいとかく物
なけかしき身ならさらましかはなとかはかゝるおほかた
なるありさまにては見さらましとさすかに心くるし
くおほしやらるゝところ〳〵もあれといてやこの世も
」（一一〇丁ウ）
あの世も思ひしことはたかひはてぬるかはりには
かうなからもさやうにみたりかはしく心をわくるかた
たになくていま二三年たにすくしてはいみしからん
ほたしともをふりすてゝ世をそむきなんとおほし
けるしも月には五せちなといふこととともにより女御
まかて給ぬへきをくちおしうおほしわひつゝなとかく
やすからぬ身となりけんとのみおなし事をのたま
はせつゝゆるしかたけなる御けしきなれとけにか
きりある御ことなれはさのみもえおしみはてさせ
給はてまかて給ぬる名残もいとわりなきそあまり
」（一一一丁オ）
まきるゝ方かたなきわ（は）さにこそとおほしられける
はかなくとしもかへりてかものまつりの程にも成ぬ
れは御けいのこせむともつかひなとさためさせ給
にもすきにしかたの事ともおほしいてられて斎院の
わたりつねよりも恋しくおほしやらせ給におほかたの
殿上人なとの心〳〵にしつゝあまたまいらせしあふきとも
はさる物にてみつからの御れうなとは我御心とゝめ
させ給つゝたてまつらせ給しをのみもたせ給へしかはおや
やけしきゑところなとにてのあら〳〵しきにはあらて
さるへきくら人ともうけ給て日ことにかはるへき女房
」（一一一丁ウ）
のれうともなとさま〳〵にせさせ給さま心ことに
めてたしなともよのつねならぬさまにしたてさせ給て
なをおしみ人たのめなるあふきかなてかくはかりの
契ならぬにと御れうなるはへちなりつゝみかみに
かきつけさせ給ても院なともこそ御らんしつくれと
おほしかへせとしとろもとろにやおほしなりぬらん
ひきもかへさせ給はすなりぬ御つかひは五位くら人
にやあらむおほしやらせ給しもしるく院のおはします
ころなれは御つかひかひ〳〵しくもてはやさせ給
あふきとものめもをよはぬをあまりおほやけしからぬ
」（一一二丁オ）
物ともかなとめてさせ給にまたへちにて心ことなるは御
まへのとみゆるにかきつけられたることゝも御らむし
つけたれといとかはかりおほくの年月をへておほし
こかれたまふ御心ともしらせ給はねはたゝおほかたの
ことをのたまはせたるとのみ御らんして御てをのみ

めつらしからん人のやうに袖のいとまなくをしのこひ
つゝめてゐさせ給へり斎院はなまくるしくおほしめ
さるれと御返とく〳〵とのみきこえさせ給へはおほ
しもあへすたゝ
　あふきてふなをたにいまはおしみつゝかはらは風の
」（一一二二丁ウ）
つゝくやあらましとあるを御らむしてもれいの心をのみ
そつくさせ給まつりの日は近衛つかさの使のしたゝ
まいるをうらやましく見をくらせ給て
　ひきつれてけふはかさししあふひさへ思ひもかけぬ
しめのほか哉とおほしつゝけてなかめさせ給へる御
まみなとのなを国王ときこえさするにもあまりて
けたかくなまめかしく見えさせ給へりかくて藤つほの
女御みけしきありて院のうちところなきまてほう
しもそくも世にあるかきりはたちこみてゆすりみちたる
に内の御つかひあめのあしよりはしけゝれと行かへる
」（一一三丁オ）
ほとも心もとなくいかに〳〵とおほしめしやらせ給に
いとたいらかにておとこみこにてなときかせ給御心ちをろ
かならんやはまいてめにちかく御らむしあつかひきこえ
させ給ふほり河の院の御けしきことはりもすきてか
きりなき女御の御さいはひと見えたり一品の宮のひめ
君の御ことをたに世の人はしらねはたゝこれをはしめ
たる事と思ふにいみしくともわか宮の御おほえはいまは
いかにそはうにゐ給はむ事もさはいふともまことの当代の
今上一の宮をはおとしきこえ給はしなとまたしきに
きゝにくゝさためきこえさするをさかの院にはけに
」（一一三丁ウ）
いかゝときかせ給そおこかましきやこの宮の御うつくしさの
なのめならむにてたにうち〳〵のことしらせ給はぬ御心とも
にはけに行末も思ひおとし聞えさせ給ひかたけなる
御けしきもことはりなりたゝ大宮院なとの御ひさの
うへにとりかへ〳〵あつかひきこえさせ給へるさま
けによの人の物いひもかなひぬへきにやと見えたる
大貳の三位なとうちにまいりつゝかゝる御けしきになとそう
するをきかせ給にも若宮の御おりよそのことにうちきゝきて
すくしゝにまれ〳〵中納言のすけのほのめかしいてたりし
よりあさましくかなしくうつし心もなく成そめてかの
」（一一四丁オ）
たつの一こゑきゝつけたりし雪のよの事もまつおほし
いてらるゝにかはかりも我物と見たてまつるはあるへかりし
事かは我年ころひとへに哀にかたしけなく心くるしき
かたにも又あかすくちおしき人の御ことの年月ふれとす
こしも思ひなをされぬ心のうちのかはかりにもとりあ
つめていま行末いみしき人いてくともひとしうたに思ふ
へくもあらぬ物をいまよりかくさへ人のいふらんをもしみ

にと、めてかのわたりにも聞給やうもこそ心くるしうお
ほしつ、くるおりしもあたりもひかるはかりなる御かほつき
にてさしいて給へるをひきよせたてまつり給へはゆら〳〵
（一一四丁ウ）
と女のやうなる御くしのきよらなるかきなてつ、ほり川の院
には二の宮をうつくしかりなつき給て宮をひさしく
見給はぬこそ心うけれなまろよりほかにかきりなく思ひ
きこゆる人のなきこそあはれなれとの給はするをとしのほと
よりこよなくおとなひしつまり給へるけにやけにとお
ほすにすこし涙くみてまゆのあたりもうちあかみてう
つふし給へるかしらつきかみのかゝりひたいつきなとは
かの昔ほのかなりしほかけにもいとよくおほえ給へりかし
と御らむするに我も涙こほれさせ給ぬかやうなるあり
さまにつけてもさりとも見なおし給心のほともあり
」（一一五丁オ）
なまし物を行末はたかゝる人もあれはうき世とのみおほ
さるへくもなかりける物をいかにしなしてし我心そときのふ
けふのやうにくやしく哀なる事そ猶かきりなき御すゝり
のあきたるふてをとらせ給て
かなしさも哀も君につきはてゝこはまたおもふ
ものとしらぬをとかゝせ給て見せたてまつり給へは
さすかにうちゑみ給てこれにはかならすをとり侍なんかし
とてうちそは見てかき給手つきなと女宮にそせま
ほしき
ことはりもしらぬ涙やいかならんわれよりほかの
」（一一五丁ウ）
人をおもはゝとかき給へる御てのうつくしさをことはりそ
かしたれにに給てかはなに事もなのめにと御心にも
ことはられ給にこのしらぬ涙そ哀におほしめさるれと
さかの院のおはせん程はこの御心にもいひしらせ奉らしと
おほすなるへしさしも御心とまらぬわたりにたにおとこ
みこむまれ給へるに行幸あることはつねのことなるに
これはまいて大宮を見たてまつらせ給はんこともいと
かたけれはさま〳〵に心もとなからせ給てなぬか過るまゝ
に行幸ありひさしく見たてまつらぬ事をなけく
人たかきもくたれるもあまたありてこの程にとたち
」（一一六丁オ）
こみたる物見車ともかち人ともこちたきまておほかり
ひさしく御らむせさりつるしつのいほりとも、又たま
さかにたちより給しいもかすみかのま木の戸とも、
哀にすきかたくみいれさせ給にゆゑなからぬけしき
しるくさはかりにやとみゆるさしきくるまとものまへは
いかにつらき心とみるらむとおほすもくるしくてしり
めはかりたゝならてすきさせ給をけにあるへき物をと
中〳〵にあかすくちおしくおほさるゝ人〳〵そおほかりける
まちつけきこえさせ給へる院のうちにもかみしもめ

つらしき御みゆきを見たてまつりよろこふにまいて
」（一一六丁ウ）
大宮はいま〳〵しきまて涙もろにおはしますなにやかや
と御物かたりしはしはかりにてそわか宮見たてまつりには
わたらせ給けるいひしらすうつくしき御かほつきなと一の宮
にたかひきこえさせ給はすおなしさまにてふさせ
給へはものとしらすとかやのたまはせしかとけにこれも
をろかには思ふましかりけりとそ御らむしける
女御はなやましけなる御けしきにてあえかにほそり給
へるいとゝ心くるしくあてにらうたけなることまさり
給て見をきかたくおほしめさるれと暮ぬれはかへら
せ給ぬ院の別當けいしともなとれいの事なれは
」（一一七丁オ）
かゝゐしけりかく思ふさまにめてたき御ことをきかせ給
にも一品の宮は物をのみおほしなけくけにや御心ちも
まことしうくるしからせ給てつゐにあまにならせ給ぬる
を一条院にもうちにも返〳〵くちおしく哀におほしめす
にいくらはかりの日数もへてうせ給ぬれはいと
あさましくかなしくおほしめすなかにも内には心とけて
すき給ぬるを心くるしくかはかりみしかりける御命の
ほとをなとてさしも見えたてまつりけむなとれいの
過にしかたしのふ御くせなれはつねよりことなる御なみた
もろさなりされと宮の女御后になしきこえさせ給て
」（一一七丁ウ）
わか宮ひきくしてまいらせ給て御らむするにはさのみ心ふ
かき御心といひなからもやうの物といかてかしつみいらせ
給はむ露はかりわくる心なくてこの世にはすきはて、
後の世にもおなしはちすにとのみいひちきらせ給つ、
あけくれさしむかひてたゝ人のやうにてすくさせ給
御ありさまいにしへにたとしへなきもたゝこの御さいはひ
のなのめならさりけると世人〳〵いひ思ける月日も
はかなくすきて宮の御はてなといふことゝもすきて又の
年の秋冬はおほはらの春日平野なとの行幸あり
はしめてめつらしき御みゆきなるにそへてもみかとの
」（一一八丁オ）
御かほかたちありさまこの比さかりにねひとゝのをりはて
させ給てすこしもなのめならん事はあかすくちおしかり
ぬへき御ときなれはにやあなかちに物このみする人のみ
おほくなりて上達部殿上人なとの馬くらのかさりもとねり
むまそひのなりかたちなとも世にめつらしきさまにもと
たれもいとなみ給へれはみところはこよなきをいかなる
人か見ぬはあらんほりかはの院にはひわたらせ給し程たに
たちこみたりし物見車のこちたさなれはまいてたひ
ことにあかす見奉らまほしきまゝにれいにもたかひて
心あはたゝしきみち大ちのさまなりかもの行幸は九月
」（一一八丁ウ）

つこもりなれは野への草とも、みなかれ〳〵になりて
みちしはの露はかりそみしにかはらぬ心ちしけるこゝろは
ゆかすなからもあまたたひ行かへりしそのかみはなに
事をかはおもひけんと恋しくおほしいつるにれいのかき
くらさるゝ御心のうちをもしらす河わたらせ給ほとはかよ
ちやうのこゑ〳〵もきゝにくきを身もなけつへき川
の契りをなとかくいふらんときかせたまふ
おもふ事なるともなしにいくかへりうらみわたりぬ
かもの河なみなめけなる心のほとはきしかた行末こよ
なくおほゆるを露はかりおほしとかめすかうあるましき
」（一一九丁オ）
さまにさへしなし給へる神の御心はへをおもへはかたしけ
なくありかたく思ひしられ給をひとかたしも見かたう
成給にけるのみそなをさらにうらめしくおほえさせ給
神のやしろに御はらへつかうまつるにもすきにし年
たて給へりし御願かなひ給てけふまいらせ給たる
さまいまより後代を久しくたもたせ給へきありさま
なときゝよくいひつゝくるはけにあまてる神たちも
みたて給らんかしときこえてたのもしきをさしも
なかうとはおほしめさぬ御心の中にはうれしかるへくそ
きかせ給はさりける
」（一一九丁ウ）
やしまもる神もきゝけむあひもみぬ恋ひまされてふ
みそきやはせしそのかみに思ひしことはみなたかひて
こそあんめれとそおほしめしける十月かみの十日はひら
野の行幸なりけりこのたひは紅葉のさかりにてはゝ
そはらおかしうわけ入せ給に山はみなくれなゐなるを
見わたされ給にも忍つゝも御らむせぬところ〳〵は
すくなかりしかは北山のあたり報恩寺は袖ぬらす宰
相のかよひ給しところなとはおかしかりもおほし出らるゝに
梢の色も心ことに見やらるゝを煙もところ〳〵に
たちふもとをこめたるきりのへたてもたと〳〵しきは
」（一二〇丁オ）
中〳〵いとゝ恋しき事おほく御らむしわたすに斎院の
わたりの紅葉もいみしうさかりにて色〳〵のにしきをひき
ちらしたるやうにみえわたされたるに嶺のあらしあら〳〵
しく時〳〵聞わたしてちりまかひたるなとゑにかゝま
ほしきをさしも思ふあたりならすとも心はかりはあくかれ
ぬへきをいとゝひとつかたにのみなかめいらせ給へり
神かきの枕の木すゑにあらねとも紅葉のいろも
しるく見えけり御らむするにもかひなしふなおかの
あけくれさしむかひたりしをめつらしきともとおほし
なくさめてたちかへらせ給もあかすわりなくてひき
」（一二〇丁ウ）
よかぬわさもかなたゝいまなに事をしていかやうにてか
おはしますらむなと見たてまつらまほしうおほしめさるゝ
にたましゐもはやくあくかれぬらんとまてかへり見させ給

あはとみる身はふなをかにこかれつゝこゝろはゆきぬ
こはゆけるかはなとやうに野山川のそこを御らんするに
つけつゝもおほししみにしかたさまの事はさらにわすれ
させ給はすかつみる人の御ありさまのめてたくおもふさま
に御らむせらるゝにつけても我御すくせのめてたかり
けるはかた〳〵につけつゝなのめならすおほししらるゝ
物から御心の中はさらにやすかるへくもなかりけり
」（一二二丁オ）

こき殿にひとりすみ給ひめ君の御事は心くるしう
おほしあつかひつるに宮うせさせ給てのちはほり河の院
も大宮もつねにわたらせ給つゝ見たてまつらせ給にいと
はかなうきかせ給し道芝の露のかたみとまきらはす
へうもあらすなまめかしうおかしけなる御かたちはわたり
けむは、君の御さまさへおほしやられていとあはれに
かたしけなう御らんせらるれはいまゝてかる〳〵しき
御名さしをもあるましき事なるを一の宮の御けん
ふくあるへきにやかて御もきのことおほしいそかせ給
けりなに事もおほやけさまにあらすほり河の院の
」（一二二丁ウ）

御いそきなれは世のためしにもすはかりなる御いそき
のありさまなりときはのあま君のむすめのこたち
よりほかには宮の御もてなしのいとあなつらはしけに
おほしめしたりしかはさふらふ人〳〵もうち〳〵にはなま
いかにそや思ひたりしかといまはかみしもさなからこの御
かたにまいりあつまりていとやむことなくてまことしき
人〳〵のあまたさふらふ一条院にもこ宮のあはれにおほ
しあつかひたりしこと御らむししりにしかはかたみに
もたれをかはとおほしめしてかゝる御いそきをもきゝ
はなたせ給はす心ことなる御さうそくあふきたき物
」（一二三丁オ）

なとやうの物をそ御心さしのしるしことにてたてまつら
せ給けるその夜のありさまかきつゝけすともおもひやる
へし二宮の御はかまきもこよひなりけれはよろつさし
あひてさま〳〵のめてたき事のみあまりなれはせう〳〵
まねひたらむは中〳〵そこなはるゝ事もありなむかし
よろつの事きよらなるなかにもさま〳〵おとなひさせ
給へる御ありさまとも猶すくれて見ところおほく
見えさせ給けるそのなかにも一宮の御あけまさりの
ゆゝしさはなをいつくにいかなりし人そとむねうちさは
きて哀あさからぬ御心さしすくれたりこの道芝の露と
」（一二三丁ウ）

かすならすおほしあなつりしなこりとも見えぬ御あり
さまをこよひやかて一品になしたてまつらせ給つ思ひ
かけすあさましかりし道ゆきすりに心うかりし法の
師のあしもとなとたゝいまの心ちしてめつらかにも哀に
もおほしめしいてらるゝ事おほかるにこよひの御あり

さまを見給はぬくちおしさをそなを〳〵あかすおほし
めさるゝこの世はとかやありし夢さめてもしいかやう
なることのありけるそとはしめて心えかたうおもひ
まとひし暁よりはしめて我物とみるへきやうも
なかりしによりいかゝはせむにおもひよはりて見たて
」（一二三丁オ）
まつりし人さへひとりにうちまかせて我はうせぬるも思へは
さま〳〵にはかなうあはれなる世なりやなととりあつめ
涙こほれぬへきをいま〳〵しうおほしかへすへかめれと何
事のおりもまつ心のうち物あはれなる事そたゆへく
もあらぬ御ありさまともなる一宮をは兵部卿宮とそ
きこゆへきなめるまたの日そさかの院へまいり給
へる御まへにてよろつにつくろひきこえさせ給へる
御さまのうつくしささらにねひゆかん行末をしはかられ
てあまりゆゝしきまて御らんせらるゝをさりともむけには
見はなちきこえ給はしとたけうおほさるゝ物から
」（一二三丁ウ）
いかはかりの心にて年月ふれとかはらぬ御心のつらさなる
らむとけふは猶すこしうらめしさもたくひなけれは
雲のかよひちあとたえて後はいとゝやるかたなき心
のうちはかりにおほしめす御文なれとこまやかになり
ぬよへのありさまひとり見侍しも哀なることおほくなと
やうにて

年つもるしるしことなるけふよりはあはれをそへて
うきはわすれねさりともと見え侍ありさまをけふは
御らむしいれさらんもあまり人めわか〳〵しうなとかゝせ
給てれいのしのひてをときこえさせ給へはひきかくして
」（一二四丁オ）
たち給ぬるなこりも涙ほろ〳〵とこほれてなかめさせ
給さかの院にもまちうけ奉らせ給ていかゝはなのめに
見たてまつらせ給はむかくてはいとゝ内のうへに露
はかりたかひきこえさせ給へることなきをあさましく
かのあまてる神のほのめかし給けむこともあるやうあり
けることにこそとおほしやるかたさまにもこ宮の御ため
そいとおかしかりけるれいのさほうにはいしたてまつり
給て入道の宮の御かたにはたゝまいりてさふらひ
給そ哀なるや忍てありつる文まいらせ給をかゝる事
をほの〳〵きこえいてゝさゝめきあやしかる人〳〵おほく
」（一二四丁ウ）
なりにたるにいとゝさま〳〵物をおほしなけくこと
みしきにけふの御さまはいとゝこと人とさへおほえ給
はぬ面影のはつかしささへわりなくて御らむすへきやう
もなきにましてけふしも哀そへさせ給へきにもあらす
さき〳〵はひたふるにせめきこえさせ給し御返もい
まはかうのみくるしけなる御けしきをみしり給へは
なをともえ申給はぬものからけふはかならすとの給は

せつる物をいかにほいなくおほしめさむとかた〳〵にくるしうおほいたるをいつものめのと中納言のすけなと
はかりそ見たてまつりしりたれは人しれぬ涙ともゝ
」（一二五丁オ）
おとしけるいとうらめしうおほされてうちにかへりまいり
給へはうへは藤つほにそおはしましけるやかてそなたに
まいりたまへれははしつかたにいてさせ給てさて院はい
かゝの給はせつる宮の御まへには御らんしいれ給つや
なとの給はせてつきせすうらめしと思ひきこえさせ
給へるさま院のおほしめしたるよりはこよなうまさらせ
たまへるを物の心しり給へるまゝに我心もをろかならす
おほししらるへし御いらへきこえさせ給さまも程よりは
おとなしくいまよりはつかしけなる御さまにていたうしつ
まり給へるけしきなとも今よりはこのわたりにならし
」（一二五丁ウ）
きこえむもわつらはしくおほしめさるれはれいのやうに
うちにまいりたまへとものたまはすありつる物はいかゝ
なりぬるなと思てそきこえさせ給まいらせ侍ぬと
はかりにてかひ〳〵しき御けしきもなかりけりと見ゆる
けしきもつねの事なれとおほかたにつけても今は
いとかうしもひたやこもりになさけなくやはもてなし給
へきと人わろきまてつらうおほしめさるゝにいかて
いまよりたにかはかりもきこえさせおとろかさしと返〳〵
おほしかたむれとたゝいまもさしむかひ給へる御あり
さまのなのめならぬ哀のゆかりにはなにかそれしも恋
」（一二六丁オ）
しくいかゝおほしいてきこえさせ給はさらんとはかり物も
の給はてうちなかめさせ給て猶たちかへる心
かなと御心にもあらすしのひやかにいはれさせ給ぬるを
中宮はほのきかせ給て猶もてはなれ給へる御なかには
あらさりけりと心えさせたまひて
たち帰りしたはさはけといにしへの野中の水は
みくさゐにけりいかに契しなとてならひにかきすさひ
させ給にちかくよらせ給へはすみをくろうひきつけて
おましのしたにさし入させ給をかはかりなるなからひに
さへ猶はかなき事につけてもへたてかほなる御心は
」（一二六丁ウ）
あまりなるをならはし給なめりなとてひきいてて御
らむしてありつる忍ことゝもの御みとゝまることやま
しりたりつらんあまりまきるゝかたなけれは心の中も
見しられ奉るそかしとおほしらる
いまさらにえそ恋さらむくみもみぬ野中の水の
ゆくゑしらねはとかきつけさせ給て見とかむへき
御ふてのすさひにはあらさめれと思ふ我心には何事に
かと心ときめきしてかきて侍そとて見せたて
まつらせ給ものからかやうに人にもいらせたてまつり

我もはかなきくちすさひにあるへかりし人の御うへ
」（一二七丁オ）
かはなとおほすに我あやまちのいとおしさもれいのつみ
さり所なく涙さへおちて人にもとかめられさせ給ぬへき
まきらはしにさかの院のあなかちにおほしたりしあ
まりになへてならす思ひかしつき給へりし宮の御
うしろ見にとさへおほしたりしかといまゝて世にあるへき
物ともおもはさりしかは見しらぬさまにてやみにしこそ
おもへはひか〳〵しけれ昔よりしてけふいまにもこのかたさま
につけてはいきなから佛になりぬへかりける物を見たて
まつりそめしよりこそはこの世をすてかたき物とおもひ
なりにしか哀にあちきなき事なりやかゝれはこそは
」（一二七丁ウ）
仏も止ゝ不須説との給ひけれとてそ涙くませ給ぬる
兵部卿宮は月日のすくるまゝにうへの御かたちありさまに
たかひきこえさせ所なくめてたくおはすれは春宮に
まいらせんとおほしつる人〳〵の御むすめともかゝる御
かたちありさまをよそにはいかゝ見たてまつらんとお
ほしなりつゝ内にもほのめかし申給なかにもかのよし
の川あまたたひいさめ給ひしいまひめ君の御よすかと
なり給し宰相中将はこの比一の大納言にて春宮大
夫かけてそ物し給ける西国のしゆりやうそとてはゝ
しろにいりもまれ給しかとやかてそのあたりをとりはな
」（一二八丁オ）
ちて又たくひなく哀なる心さしに思ひかしつききこえて
しとけなくそきおとし給し髪もおふし給しかはかたくなし
かりし御心ものつからもてかくされてあまた年も過に
けれはいとおかしけなる御子ともおほかるなかにおほい君
すくれ給へるを大納言はいかにまれ春宮に奉りてか
ならすきさきにすへてんとおほしの給をはゝ君は昔の
ほいたかひてみかとをもえ見たてまつらすうと〳〵しく
成にしかはりにこの宮をたにけちかくてこそあらせたて
まつらめとからうして御心つよくのたまへはまれ〳〵はか〳〵
しくおほしよらむ事をたかへきこえしと大納言もおもひ
」（一二八丁ウ）
なりに給へるにや一品宮の御かたよりつたへそうせさせ
給ひけるかの几丁のほころひあらそひしけはひとも、たゝ
きのふけふの事にのみ思いつるを我も人もかやうの事
いひかはすはかりのすゑ〳〵あまたたち出給ふまて成に
けるよとあはれにもおかしくもおほしいてらるゝ心のかきり
もてかしつかるらんひめ君のありさまなともいかならん大納
言はおほかたのをきてはかりこそあらめうち〳〵の事母君
のをしへのまゝにそあらむかしそれを見くるしとおもはむには
大納言さてはありなんやなに事もあら〳〵しく心をやり
てうちはやりたる人からなれはそかしとおほしやらるゝたに
」（一二九丁オ）

いとうしろめたくわりなきに琵琶のねひきつたへてや
あらむと思ひやらせ給はひとりゑみせられさせ給てかひ〳〵
しくそいらへさせ給はさりけるいとわかき程はあまりさた
まりゐん事はくるしうおほえしをいま二とせ三年すきなは
みつからもえかくてもあるましけれはさやうの程にたれも〳〵
まいらせたまへとそのたまはせけるきりつほを母宮の
御しつらひのやうにめてたくきよらにせさせ給て女房
なとのかたちすくれたるかきりあまたさふらはせ給てそ
おはしまさせ給けるほり川の院にもうへのはやうおはしま
し、かたにおなしさまにていてさせ給おり〳〵はもてかし
」（一二九丁ウ）
つき、こえさせ給へるさまなのめならす中宮もかの御心
さしありてつくらせ給し三条殿にいまはいてさせ給へは
この院には一品宮のおはしましところをそ返〳〵みかき
たて、あした夕のいとなみにはこの二所の御事をおほしめし
たりさるはわたくしの御心ともには二の宮の御思ひには
ならひ給へきやうもなけれと兵部卿宮の御ことを
内のなをすくれて思ひきこえさせ給へれはうはへはかりは
おとさせ給ことはなし一品宮もいまはおとなひさせ給に
たるを春宮はむかしよりの御心さしかはらすいまは御つかひ
しけくまいりつゝうらみきこえさせ給へれとこ宮の御
」（一三〇丁オ）
ありさまなとをおほしあはするにもいてや猶宮たちは
た、心にくゝてやみ給はんのみこそめやすかるへけれ
わか御心の程よりは我なからくらへくるしく心くるしかりし
心中そかしまいてかうなからさりける御命の程にては
かうやうに思ひいてたてまつる人なくてすき給なましいかに
めてたからましとおほしめせはすか〳〵とおほしたつへきさま
にもあらさりけりさるは御は、方なとにつけてもたの
もしく思ひうしろ見たてまつり給へき人もなくて行末
くるしかりぬへきさまなりとあすのふちせをしらぬ程
はなにかいとたちまちにとしもいそかせ給はん御めのとたち
」（一三〇丁ウ）
さふらふ人〳〵よりはしめ心はせすくれうしろやすかりぬへき
さまなとなるを御あたりちかくも候はせ給なとしておほかた
いとけたかくもてかしつききこえさせ給へるさまなへて
ならすいとしもなかりし宮の御おもひなりしかと人のむすめ
の御事をさへかくもてなしきこえさせ給こと、一条院を
はしめたてまつりて世の人もありかたき事にきこえさ
せしかとこの御もきの程よりそかくにこそありけれなと
ことはりに思ひけるかのゆくゑもしらすはてもなくおほし
まとはせし三河守もその、ち人知しれぬ御心のうちはかり
にはこよなくおほしへたてしかとは、北の方おほえすくれ
」（一三一丁オ）
たるゆかりにはなにしにかは思事のすこしもたかはん年
はいとわかくて大貳にも成にけれはやんことなきめとも

あまたひきくして思ふさまにてくたれとむかしの事とも
思出て物あはれなるにからとまりにてはたことみ
もしあへすうちなかれて
　帰こしかひこそなけれからとまりいつらむかしの
人のゆくゑはもの、おりことにありかたかりしさまかたち
なとをうちとけかたらふ事たになくてやみにしくち
おしさ又人をいたつらになしてしつみふかさなともわすれ
ぬにこの御もきにのほりあひてかく見ならへての世にも
（一三二丁ウ）
さにこそありけれといひさたむるにあさましかりける山ちも
思ひあはせられていましも心のうちにかしこまりなけき
つ、かけてたに思出てしのふこともせしかたしけなしと思ひ
成にけりときはのあま君はうせにしそかし心ちかきりに
おほえけるおりいとちいさくおかしけなるこからひつを
とりいて、これあなかしこをろかにし給はてしのひて宮に
御らむせさせ給へ御うふきぬやむかしの人のかきすさひ
給へるゑともなとのやりすてんかおしかりしともを
とりをきたりしなりむけにその人の御ありさまとて
きかせ給事なからんよりはもの、心しらせ給なむに御らん
」（一三三丁オ）
せさせんと思ひしそとてむすめにあつけたりけるを
うせて四十九日なとはて、まいりたるにつれ〳〵なるひる
つかた御まへに人かちにもなけれはあまきみのゆかし
かり○申つ、なくなりにしありさまなときこえさするつゐ
てにしか〳〵のものこそさふらへと申いてたるをゑをなんい
みしく
かき給しなむとさき〳〵もきかせ給てあれをたに
御かたみにみはやなとおほしねかひつれはいみしうゆかしと
おほしたるもことはりなれは御几帳ちかくひきよせ
なとしてとりいてたり御うふきぬのありけるをまつとり御
らむするに我きたりけん物ともおほされす物けなく哀
」（一三三丁ウ）
けなるにつけてもかはかりの程をひきはなちてもてさ
すらはせ給けんほとのかなしさうらめしさもいひしらす
かなしくおほさるゝに
　人しれぬいりえのさはにしる人もなく〳〵きする
つるの毛衣とさへかきつけられたるを見つけ給へる
御心ちいかはかりかはおほされつらんいと心くるしきけし
きを中将はなにしに御らむせさせつらんいますこし
おとなひさせ給てものゝ哀ものとむはかりにてこそとり
いつへかりけれとさへおもへとも家もしのはれすかなし
き事おほく見ところあるゑとも、ゆかしけれはかたはし
」（一三三丁オ）
つ、ひろくる程にをとなくてうへのふとわたらせ給へは
なにとなくとりいれて中将はのきぬるにちかう物させ
給ていとつれ〳〵なりつれは御こともひかせたてまつらん

とてまいりきつるなりおなしくはき、所あるはかりをしへ
なしたてまつらんなとの給はすれとれいならぬ御けしき
にてまきらはさせ給へはおとろかせ給てゐいならぬおほさ
るゝかなときこえさせ給へと御いらへもなくてたゝ
うつふさせ給へるにこほれかゝりたる御くしのかゝりかほやう
なといとゝらうたけさまさらせ給へるもたゝむかしの人と
おほえさせ給へりあまりあやしからせ給もかたはらいたけ
」（一三三丁ウ）
中将そかのときはにさふらひしおい人の昔みえ侍けるあや
しのほくともをとりをきてさふらひけるをうせ侍にし
のち御らんせさせよといひをき侍しを思ふ給へいて、
つれ〳〵のなくさめにとりいて、侍つるあはれけなる事
ともさふらひ侍けるにやとそうすれはけにさもおほし
ぬへき事にこそはむかしの人のかはりにはさゝのわき葉〇もた
たのむへきさまにいひ契しかひなくかきりの程をしも
しらさりけるこそほいなき事なれのちにこそみちすゑ
もいひいてたりしか日つゐてなとえりけるとかいま一と
せうそこをたにせてくちおしきことなりやそこのさ
」（一三四丁オ）
ふらはぬもつねのさとかちにめなれてとかめさりけるよ
この御ありさまもいみしくゆかしけにものせし物をなと
の給はせてありつるこからひつをひきよせさせ給てこれ
や昔のあとならんみなはかなしとかやひかる源氏の、給
ける物をとはのたまはすれと御らむするにみつから
かきあつめ給へるゑともなりけり世になへての人の
事ともみえすありかたかりけるふてのたちとはいつ
れもみ所ありてめてたきなかにも我世にありける事
とも月日たしかにしるしつゝ日記してさるへき所〳〵は
ゑにかき給へり我時〳〵も御らむしそめし程よりの事とも
」（一三四丁ウ）
はいますこしめのみとまらせ給て哀にかなしくおほしめ
さるゝ事かきりなしみつからのありさま我御かたちなとも
たかふことなくてうちしのひつゝたちより給しよな〳〵の
月のひかり風のをとなひよひあかつきの空のけしきなとも
わか心におかしくも哀にもめとまり心をしめ給けるおり〳〵
をかきあらはし給へるよろつよりもかの御心にもあらす
つくしへくたり給ける程のありさまはめのみきりふた
かりてはか〳〵しくたにえ御らむしやらすうたとも、扇に
かゝれたりしなとおなし事なれはとゝめつときはに
帰て心ちすこしおちゐるまゝにおもひつゝくることおほく
」（一三五丁オ）
くちおしかりける身のすくせいとかなし我とはおとろ
かしたてまつるへきやうもなく人はそこのみくつとのみ
こそきゝなし給けめいまは世にある物ともおほされしわ
すれ給ぬらんかしなと思給けるほとにや
わすれすはゝ山しけ山わけもこて水のしたにや

おもひいるらんこの宮むまれ給てのちいと、物をおもはし
さまざりていといみしく心ちもいくへうもおほえさり
けれは一品宮にわたしたてまつりてんと思ひなり給ひ
けるありさまかなしともよのつねなり御むかへにちある
人なと給はせたれは心ちのくるしさをねんしてうちゑみ
」（一三五丁ウ）
つ、物かたりもたかやかにし給をかほに涙もあへすほろ〳〵と
こほれかゝれは袖をかほにふたきてえたに見たてまつら
ぬにあま君御心ちいと、くるしきにいとかくなおほしいりそ
たいらかにたに物し給はゝ忍つゝはつねに見たてまつり
給てん行末なかくこそおほされめあなゆゝしとていた
きとりたてまつるをなをしはしはなともえの給はす
ゆくすゑをたのむともなき命にてまたいはねなる
松にわかるゝとあるを見給へらん宮の御心ちけにいか
はかりかはおほされつらんとおほしめすに又あまになり
給にけるにもいひ契給ひしことゝもまつ思ひいてられ
」（一三六丁オ）
給ていみしうなき給へる所に
をくれしとちきらさりせはいまはとてそむくもなにか
かなしからましとあるを御らむしはつるまゝにさくりもよゝ
とかやみたれかはしき涙のけしきを中将かちかくてきく
らむ事もあまり心よはきやうなりとおほしつゝめと
なくより外のことなし
かすめよな思ひきえなんけふりにもたちをくれては
くゆらさらまし
おちたきる涙のみおははやけれとすきにしかたに
かへりやはするなとかきつゝけさせ給ても返〳〵かひなく
」（一三六丁ウ）
おほしめさるゝ事かきりなけれは宮には御らんせむたひ
ことに中〳〵なみたのもよほしとも成ぬへく又かの人の
ほたしにもいとゝかゝりぬへき物にて侍めるをこのひとまき
はかりはすゝしきみちのしるへにもなし侍らんいまは
とてもかくてもかひなきことをすきぬるかたのことなおほし
なものせさせ給ひそなときこえなくさめさせ給てこの
ゑひとつをとらせ給てわたらせ給ぬるを宮は心のとかに
見すなりぬること、あかすくちおしうおほえさせ給て
ひくらしなきくらさせ給さま心くるしけなりうへは
一ところおきふし御らんするに海山浪風のけしきより
」（一三七丁オ）
はしめて女のしわさとは見えすかきすましたるふての
なかれひきこめてやみなむはくちおしうおかしさも哀さも
見しらむ人に見せまほしきをさい院はかりにはいみしく
御らんせさせまほしけれとみつからならさらむかきりは
さすかにめはなちかたき物を心のとかにをきたらんも
あすもありとはおもふへくもあらぬ世に見るほとの心
さしにはこれをたにもとふらはんあるにまかせてありぬへ

かりける身のほとをたゝ我ゆへこそはこの世をもいとひすて
あの世のさまたけともなるらんとおほしめせは我御もとに
のこしをかせ給もいとおしくおほしめされて」（一三七丁ウ）
すきにけるかたをみるたにかなしきにゑにかきとめて
わかれぬるかなとおほしめせとありし扇はかりをの
こさせ給てこま〳〵となして経のかみにくはへてすかせ給
てこんていのねはん経御てつからか、せ給けりかのときはをも
やかて寺になさせ給てこの御れうのくとくはそこにて
そ月日にそへてつくりかさねさせ給けるさかの院の御
こゝちなやましくおほしめされて程へにけれとかく
こそなともの給はせすうちはへ御ときも御さははかりを
とらせ給つゝかのいもゐはかりにて阿弥陀仏にむかひき
こえさせ給てたゝとくむかへさせ給へとねんしいらせ
」（一三八丁オ）
給へるに此十よ日となりてはおさ〳〵えおきゐさせ給はす
ならせ給にたるにそたれもみたてまつりさはきける
一条院の后兵部卿宮なともこの比はひとつ所にあつまらせ
給ておほしなけくさまともいと心くるしけなり御かと
もとよりあるへき程の御心さしはかりはあらぬ御中なれは
おほつかなかりきこえさせ給を院よりもいま一たひのたい
めんはかならすあるへきさまにきこえさせ給へれは八月
一日ころ行幸あり院いみしくおほしよろこひてあなかちに
おきゐさせ給て御たいめんありみたてまつらせ給しころ
よりもいみしき御さかりにてあるへきかきりねひとゝの
」（一三八丁ウ）
はせ給へる御さままことに見たてまつらはいのちのひぬ
へきをまつうちなかせ給て月ころも物いと心ほそくて
けふやとのみ思ふ給へつるをかゝるみゆきをまち侍りて
なむけふまてもなとのたまはする御さまもけにいとたの
もしけなうよはらせ給にけるといとかなしく見たてま
つらせ給いとかはかりにならせ給ふまて御いのりなともさらに
せさせ給はすをとなくてすくさせ給つらんこそいとあしき
ことに侍れすこしもれいならすおはしまさむおりなとは
明くれつかうまつるへき物とおもふたまへしほいなくいまゝて
見たてまつらさりけること、てうちなかせ給をいとかたし
」（一三九丁オ）
けなく哀におほしめさるなにかいまはおしむへきよはひ
にも侍らすなからむのちにこのとまり給はん宮たちをと
ふらはせ給はんのみこそうれしき事には思ふ給へき兵部卿
宮はいまはさりともいたつらにはなさせ給はしと御心さし
の程もたのもしくおもふ給へ侍れはいと心やすうなりて
侍り入道の宮こそこの世をわかれん事ももろともにと
おほしねかひ又みつからもと、めむは心くるしき事におもひ
給へれとつゐにはそのおもひもたかひぬへきに侍める
をおほしをこたらすとふらはせ給へおほやけにならせ給
ては中〳〵かやうにさひしきやとをおほしやらんことはかたく

」（一三九丁ウ）

こそ侍れと御心の程を見をきて侍れはたのもしくなむ
くらゐをさらせ給てもこゝをあらさてかならすすみ給へ
なと申をかせ給へはなに事もおほしをきてむにたかへ
させ給ましきよしをきこえさせ給にくれぬれはかへらせ
たまひなんとて入道の宮のおはしますなかへたてのしやう
しくちによらせ給て御あふきをすこしならさせ給へは
中納言のすけきゝつけてまいりたるもむかしの心ち
せさせ給ていとゝ物あはれなりこゝのへの宮つかへ
のむけにをろかなるもこの比はいとことはりとみゆる
野へのけしきかなとのたまはせてかゝるつゐてなとに

」（一四〇丁オ）

みつからきこえさせては又いつかはとれいの心つくしなる
御けしきもめつらしくてまいりてきこえすれはつね
よりも物おほしみたるゝころにてなに事をかはきこゆへ
からんとてうこかせ給はぬを院もきかせ給てみつから
猶きこえさせ給へ人つてにはあるましき事なりと御
せうそこあれはいとういゝしくつゝましけれとやかてお
はしますところちかき程なれはすこしよらせ給へるを
さにやとおほゆる御にほひのうちかほりたるもまたな
らはせ給はさりつることなれは心さはきしてうれしきに
むねさへおとろゝしくなるも人わろき御心なりいまは

」（一四〇丁ウ）

いかてかけゝしきも見えたてまつらてかゝるかたに
つけても見なをされたてまつるわさもかな思ひいふにも
かひあるへき御さまにもあらぬ物をなとしゐておほし
なくさめつゝこの御心ちのことなとをすくよかにきこえな
させ給へはけにかたはらいたくきゝくるしき事には
あらねとはかゝしくいらへきこえさすへきこともおほえ
させ給はねはたゝうちなけかせ給へるもあやしくなへ
てならす物あはれけに心くるしき御けはひなを人よりは
ことにおほさるゝをかくしなしたてまつりけんよとおほ
しつゝくるにそしのひかへさせ給つる涙もりいてさせ

」（一四一丁オ）

給ひぬるあさましくおほつかなき御もてなしをおもへは
すへて身よりほかにつらき人なけれは猶いかてとくあら
ぬところもかなとねかひ侍もいさやさてもかくうき物に
おほしはてられなからいつくにもありかたくや後の世も
いたつらとかやなし侍らむこそいみしけれしにもせしとかま
ことに身を〇おもひ給へわひにたれ

消えはてゝかはねははいになりぬともこひのけふりは
たちもはなれしとの給はするまゝにみすのうちになからは
いらせ給て御そのつまを引よせてなきかけさせたまふ涙
のしつくのところせさもおそろしくわりなきに院の

」（一四一丁ウ）

御かたより道たとゝしからぬ程にかへらせ給ひねみたり

心ちもいまなむきえはへるやうに思ひ給へらるゝときこ
えさせ給へるをきかせ給御心ちとも御さま〳〵にみた
れて物もおほえさせ給はぬに右大将まいり給ひて
御こしよせたるさまそうし給へはいてさせ給ふ御心ち
中〳〵おほつかなくてすくさせ給ひし月ころよりも
あかす哀におほしめされて御こしにもたてまつりや
らす御まへの花さかりにさきみたれて夕露をもた
けにひもときわたしたる色〳〵いつともなく見をき
かたきなかにをみなへしの人のみることやくるし
」（一四二丁オ）
からん霧のたえまわりなけなるけしきにてたち
かくれたるはなをいとすきかたくおほしめさる
たち帰りおらてすきうきをみなへし猶やすらはむ
霧のまかきにとなかめいらせ給へる御かたちの
ゆふはへなをいとかゝるためしはあらしと見えさせ
給へるにとゝもに物をのみおほしてすき給ひぬる
こそいかなりけるさきの世の契にかとこそ見え給へれ
」（一四二丁ウ）
（白紙）　（朱長方印）」（一四三丁オ）
此狭衣全部四帖元斎寿三
借予本書写畢外題所望之
次加奥書也
天正廿年桃花之節後
法橋紹巴（花押）」（一四三丁ウ）
當于
大閤大相国朝鮮国御征伐之
時張陣於肥之名護屋者春
月也今茲季秋廿五日詣西府之
天満宮維持幸而有連歌一千
句之雅会不顧愚昧陪席末実為」（一四四丁オ）
神助也此狭衣全部四冊在洛陽借
臨江老人秘本雖謄写之當社一乱以来
作灰燼故別当信寛態求也仍奉
納之而後代留予名於此廟者栄之又栄也
越後木戸元斎
天正二十稔菊月廿五日　寿三（花押）」（一四四丁ウ）
（遊紙一丁）
（後見返し・裏表紙）
（以上）

（こばやし・ただまさ　本学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）